

## 「主イエスの降誕物語」

2015年04月02日

ルカによる福音書 1章5節～12節。ユダヤの王ヘロデの時代、アビヤ組の祭司にザカリアという人がいた。その妻はアロン家の娘の一人で、名をエリサベトといった。二人とも神の前に正しい人で、主の掟と定めをすべて守り、非のうちどころがなかった。しかし、エリサベトは不妊の女だったので、彼らには、子供がなく、二人とも既に年をとっていた。さて、ザカリアは自分の組が当番で、神の御前で祭司の務めをしていたとき、祭司職のしきたりによってくじを引いたところ、主の聖所に入って香をたくことになった。香をたいっている間、大勢の民衆が皆外で祈っていた。すると、主の天使が現れ、香壇の右に立った。ザカリアはそれを見て不安になり、恐怖の念に襲われた。

新約聖書において、主イエスのご降誕に関する最初の記述をしているのはパウロである。紀元後55年頃に書かれたガラテヤ書4章4節に「しかし、時が満ちると、神は、その御子を女から、しかも律法の下に生まれた者としてお遣わしになりました」と書いている。70年頃に書かれたマルコ福音書には、ご降誕については全く書かれていない。80年代に入り、マタイ福音書とルカ福音書に初めて、降誕物語が書かれている。100年前後に書かれたヨハネ福音書1章14節に「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた」と、ロゴス・キリストの受肉論を展開している。

上記の経過から分かるように、マタイ福音書、ルカ福音書が記す降誕物語は歴史的事実を書いたものではなく、神話的に創作された物語である。私は降誕物語を読んで、神話として受け止めた。ところが、教会に行ってみると、歴史的事実のように受け止めている人々がいることを知り、驚き「本の読み方を知らない人たちだ」と思った。その後、教会では聖書は「神の言葉」であるから、書かれた通りに受け止めていると知らされ、またまた仰天した。聖書も他の本と同じように、理性的、批判的に読んでいい。そうしなければ、聖書を神の言葉として受け入れる者と受け入れない者に二分され、対話が成り立たず、キリスト教の伝道はできない。降誕物語は記述からも明らかに神話的創作である。

神話的創作であるから、ウソで内容がないという訳では全くない。著者たちは、主イエスの生涯を伝える福音書を著そうとした。その時、プロローグとして降誕物語を書き加えた。旧約聖書、時代の出来事などを踏まえ、自分の主イエスに対する信仰を込めて壮大に描き出し、降誕物語の中に、主イエスの生涯のエッセンスを込めたのである。降誕物語は主イエスの福音の入り口で、これを受け入れることが福音の受容となる。

マタイ、マルコ、ルカの共観福音書は、洗礼者ヨハネの悔い改めを求める洗礼活動を「福音の初め」としている。主イエスの歩まれる道備えをしたのがヨハネだからである。ルカは、主イエスのご降誕を書くに際し、洗礼者ヨハネの誕生から書き始めている。

エルサレム神殿に仕える祭司ザカリアという人がいた。妻はアロン家の娘で、名をエリサベトといった。信仰の篤い夫婦であったが、子どもに恵まれていなかった。ザカリアは神殿の聖所で香をたく当番に当たった。民衆はザカリアに執り成しを託し、外で祈り待っていた。ザカリアが香をたいっていると、主の天使が現れ、香壇の右に立った。彼は「それを見て、不安になり、恐怖の念に襲われた。」天使は、人々の心を神に向けさせ、主イエスを先導する洗礼者ヨハネの誕生を告げるのである。